

たより

『美紗の会』

ニュース

第七号

平成五年八月十一日

発行者

「美紗の会」事務局

☎ 03-3441-2726

十年の重み

感じさせる成果

七月四日午後一時、第十一回美紗の会『ゆかたざらい』が催された。例年になく長梅雨も会を祝福するかのようこの日は一休み。場所はすっかりお馴染みになった渋谷の国学院大学・院友会館。演目も四十二を数え、会員たちはみっちり日頃の稽古の成果を発表した。

『会主挨拶』

ゆかたざらいにて
橋場 はつえ

皆様どうも苦勞さまでございました。
皆様本当に今はお忙しい方達ばかりなので、充分にお稽古できなかつたのですけれど、年月は大変なものだと私今日つくづく思いました。
この会も十年続けさせていただいて、段々と皆様のこころ……色と言いか、そういうものが出来てきて、唄とか芸事とかいうのは、その人の持つ良いものが出てきたらいいなっというようなことを常々思っ

ていたんですけれど、そういうようなものが少しずつ出て参りまして、一番望んでいた『美紗の会』という形が少しずつ色付き始めたナって、今日は舞台で三味線を弾きながら、そう言ったことを嬉しく思っております。
私も今はもう師匠が居なくなつて自分自身も芸をどういふ風にやっていたらいいんだらうというのを考えながらやっていた時期になり、ようやく少し自分も芸と言つても

のが分つてきはじめたら、今度は何で言うでしょう、何時もそうですけれど、何か形になつてきたら、また次に色んな考へることが出来てきて、今少し思うことは謙虚に生きて行くことで、人間謙虚さを学ぶために芸であるのかなと思つておりました。
そして私は師匠が居ないので、皆様は今師匠だと思つておられます。こうやってお稽古を続けて行く中で、皆様とお話したり、一緒になつて芸をやつてゆくことが私のこれから芸に生きて行くとても大事な過程と言いか養分と言いか、その様なものだと

員や会友が集り、熱心に参加したこと、いまや方々に散開し花を咲かせている層の厚さを感じさせた。
別格である飛田は別にして、小高、岡崎、田中、増田、坂本などの長老層に対する赤坂を中心とする会社組の頑張り。大久保、山根、藤井などの中堅層、そして会長が特に賛辞を惜しまない真知子、水口、三階など新人とは言い難い新人。それらの中で清新の氣を吐く、龍也、加藤そしていつも笑顔絶やさない「てる女」などなど。
一方稽古なしでレギュラー出演として定着した大西初め、ニューヨークの高橋、神戸の

ご自身も励まれているという方なんですけれど、今日は始めてこの会を聞いて下さいまして、夫々の方たちがこうして集つて下さつて楽しい一刻を持てたことをとても感謝しております。どうぞこれからもうよろしくお願い致します。
色々会のために家の母、加藤さん、今日司会の浅野さん、菊音さん、西川雅恵先生、それからお弟子さんでもいて下さる花柳千寿文先生にも素敵な踊りを拝見させて頂くことが出来てとても良い日だったと思います。
色々ありがとう御座います。

「会長挨拶」
恒例の『美紗の会』ゆかた会も十一回ということ十年経つたことになるわけですね。十年一昔と言いますが、一昔前は皆若かつたろうと思ひますが、こうやってお目に掛かると、皆さんあまり歳を取つてないよう見えますね。先生から稽古のテープを頂いたので、昨夜は、練習しなければと思つてたんですけど、ウィンブルドンの決勝が始つて延々二時間半、あれは凄かつたですね。
世界の超一流のノボトナとグラフが、もうノボトナが殆んど勝つと思つてたんだけど、最後にグラフが五ゲーム連取して逆転優勝するんですね。最後の一時間はノボトナが緊張してラケットの真ん中に当たらなくなつちやたんです。あれだけの世界一流の人があ、いう時になるとアレッシャーで……。
ところが今日の人はノボトナ以上で凄い……全然動かない。特に女の方を見ると何と言つか……、いいですね、ご立派と言つか、稽古の賜物というか。どうも何時も女性の方が旗色が良くて……。
でも今年は男性の方も良かったように思ひます。男性陣はこれからもっともっと頑張つて下さい。
ニューヨークの高橋夫妻初め遠方の皆さんも集まり頂き有り難うございました。

ゆかたざらいも回を重ね今年で十一度目となった。十年の年月は確かに会にとつて、また会員一人一人にとつても大きな歴史であり財産になつて居る、そんなことを感じさせる会だった。
その成果は恒例の『白扇』で幕を切つた舞台で繰り広げられた各自の喉やばち捌きにも現れた。
しかしそれにも増して、日頃稽古に加われない遠方の会

橋本など、かつて練習した腕前をしつかり維持していることを披露し、その成果が根付いていることを示した。
会を引き締めたのは、活動を何時も側面から後援して下さる国学院大学の高藤先生初め菊音、花柳千寿文師の友情出演。そして最後に西川雅恵師の舞で師匠が上方唄『京の四季』を披露し充実した舞台を閉じる。
幕の後は皆が楽しみにする師匠ご一家心尽くしの料理を囲んで懇親会。ニューヨークからはるる参加した真弓さん、邦楽の権威東京海上火災の竹内さんの挨拶を皮切りに会員一人一人の話、感想が好印象を残した。

「会主挨拶」
恒例の『美紗の会』ゆかた会も十一回ということ十年経つたことになるわけですね。十年一昔と言いますが、一昔前は皆若かつたろうと思ひますが、こうやってお目に掛かると、皆さんあまり歳を取つてないよう見えますね。先生から稽古のテープを頂いたので、昨夜は、練習しなければと思つてたんですけど、ウィンブルドンの決勝が始つて延々二時間半、あれは凄かつたですね。
世界の超一流のノボトナとグラフが、もうノボトナが殆んど勝つと思つてたんだけど、最後にグラフが五ゲーム連取して逆転優勝するんですね。最後の一時間はノボトナが緊張してラケットの真ん中に当たらなくなつちやたんです。あれだけの世界一流の人があ、いう時になるとアレッシャーで……。
ところが今日の人はノボトナ以上で凄い……全然動かない。特に女の方を見ると何と言つか……、いいですね、ご立派と言つか、稽古の賜物というか。どうも何時も女性の方が旗色が良くて……。
でも今年は男性の方も良かったように思ひます。男性陣はこれからもっともっと頑張つて下さい。
ニューヨークの高橋夫妻初め遠方の皆さんも集まり頂き有り難うございました。

アマースト公演 に対する反響

4月のニューヨーク公演の機会をとらえ、会主はアマースト大学日本語第32講座『源氏物語』ゼミナールで昨年11月に続き再度演奏、日本古典芸能の紹介に貢献した。

同講座を担当し、演奏実現に尽力された御馴染みのソルト先生から、演奏についての学生たちの感想文と共に、詩が寄せられた。会主の演奏がアメリカの大学生、日本文学研究の学者にどの様に受け止められたのか、興味があるところなのでご紹介する。

感想文からも、会主は単に弾き、唄ったというだけでなく、学生たちに積極的に接し、交換することによって、文化使節としての役割を十二分に果たし、また彼等に深い感銘を与えたことが伺える。

演奏は4月5日、大学のバレットホールで行われた。

☆ 西松布咏の素晴らしい演奏

(クリフ ギャラン)

第一演目、『夕顔』は長い息継ぎで、ゆっくりと物悲しい調子で始まった。詠唱と、詞と詞の間合いの取合わせ。曲はやがて速くなったが、唄は依然としてゆっくり、凄さを保ち続けた。

ついで、場違いなようにさえ感じられる軽快で、浮き浮きした三味線の長い演奏に驚くうち、緊張の最中に曲は終わった。

第二演目『葵の上』

信じられないことだが、導入部で彼女は年老いた男……へロインに侵された男のように、表情が殆んど無く鼻に掛かった声を出す男……を演じた。体を真っ直ぐに伸ばし、無表情のままだった。

それから、彼女は悲しみに焦がれる女性の声に戻ったが、姿勢は変わらなかった。

このように、私は日本人の中に行儀が良いのだが反面粗削りな点、つまり情緒と官能の源を覆い隠す非人間的な外面を見ることが往々にしてある。

曲は速く固い調子で進み、彼女は全身を張りつめたまま幻覚的な声を出し、三味線を鳴らし最高潮へと登りつめた。

突然それが中断し、急部(訳者注・序破急の急の意味か?)に入る前に歌舞伎の語りが入った。

次に唄と三味線は速い調子になった。口を大きく開き、吸い込んだ息を止めてから一気に声を出す。彼女の体は後から前へと揺れ、強い大きな発音でそれは終わった。

その楽の音は何時間も私の頭を離れなかった。本当に良かった。

☆ 三味線奏者で唄い手でもある西松布咏の演奏についての感想

(チョン コウ)

西松さんに再会できたのは嬉しかった。それは前の演奏会でのあと、中華飯店の『ダイナスティ』と一緒に飲んだことを思い出させてくれた。あの店も今はもうない。

何時ものように控え目に教室の後ろに座る時、私を見付けた彼女は親しみを込めて挨拶をした。彼女は私の記憶通り美しかった。

私は心から彼女の演奏を楽しみにしていたし、また彼女は期待を裏切らなかった。その美しい声と、際立った三味線の交響は、十分に堪能できる時を与えてくれた。

演奏が終わり、彼女は全員に日本から持ってきた贈物を配った。彼女は聴衆と一緒にいると心地良げに見え、皆の質問に答えるときは全くくつろいでいるように思えた。

本当に素晴らしい演奏だった。

西松布咏への献詩

ジョン・ソルト

Pele kicks a soccer ball
Chaplin dances the blues

Nishimatsu Fuei
in willow-patterned kimono
sits with compact charisma
on a cushion on the hardwood floor

her shamisen strums
and high-flying voice
evoke a bygone age
of estheticized sadness

she is gentle Genji
and his best friend To no Chujo
she is Aoi possessed
and the childish Murasaki
she is Yugao fragile as dew
and jealous Rokujo gone mad

she is the perfume
the sight the touch
of woman and man
as essences

she enfolds the audience
in her magic carpet
when she stops playing
everyone disembarks
levitating with ears
hollowed to ecstasy

ペレがボールを蹴り
チャップリンがブルースを踊るとき

布咏は座る
小さなカリスマのように
柳模様の着物に身を包み
堅い床の布団に

三味の音と
高く流れる唄声
過ぎし美しき悲しみの
ときへと誘う

女は高貴な源氏となり
また親しき頭ノ中将になる
と、幼げな紫に変じ
露のようにはかない夕顔へ
そして嫉妬に狂う六条の君と化す

布咏は
女の、男の精となり
香りのようにただよう

魔法の絨毯に乗った聴衆は
恍惚感で空虚になった状態で彷徨い
演奏の終わりを迎える

(訳詩・齋藤)

〔ドイツ公演〕

本紙第四号でも予告した会主のドイツ公演が具体化した。在日ドイツ大使館招聘によるベルリンフェスティバルへの参加で地唄舞閑崎一門の他、歌舞伎の市川猿之助、能の観世鏡之丞などの一門が加わる。閑崎一門は舞手 閑崎ひで女・清女 地方 三弦と唄 西松布咏 胡弓 小原清歌 尺八 宮崎青歌

の他衣装、かつら、照明など総勢十名となる。

公演日と場所は次の通り。

* 九月八日

ポッツダム・シュロス劇場

* 九月十一日

ベルリン・オペラ劇場

* 九月十三日

ケルン・タンツプロジェクツ、ケルン舞台

『編集雑記』

* 誤字誤記は編集子にとつて最大の敵。
* 細心の注意を払っている積りでも、中々完璧には至らない。
* 先号の会員紹介で山根さんの名前を久子と書いてしまった。山根さんの正しい名前は洋子さんです。
* 山根さん読者の皆さんそして山根さんのご両親に謹んでお詫びします。
* 良い紙面を作るため読者の御叱正をお待ちします(た)